
一緒にトリップ！

幸町

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一緒にトリップ！

【ZPDFード】

Z9465S

【作者名】

幸町

【あらすじ】

学校の帰り道、コンビニのフライドチキンを買い食いして、調子に乗つて鼻歌交じりで歩いていたら、いつの間にか森の中。異世界トリップ。何故か何度もトリップするはめになるあたしだけれど、そのたびに同じ男に会つ……ってこれってどういうこと？もしかして仕組まれてる？？更新は気まぐれですが、宜しくお願ひします

(ーー)m

結 末（前書き）

短編のつもりでしたが、思ったより長くなってしまったといふ……
なので、淡々としているのはそのせいです。

結 末

恋は盲目、ハート型。

脳は花畠、バラ色人生。

今このこの男を表現するなら、きっと、いや絶対どうだらう。

反してあたしはそんな男を見てヒヒている。

そして人生じんじじつてこつたといふ。

「ああ、やはりあなたは、わたしの運命のひとですね……」

まあ今すぐこでも婚約・結婚、いえもつこつ身を結びまじょう。
そつ言つて暴走する派手派手しい金と白の軍服を着ている妙にキレイなその男が、あたしを、いわゆるお姫様抱っこして、どこかしらへ連れて行こつとする。

「うう、何でそうなるんですか……」

てこづか、

展開が早すぎやしませんか？

いくらキレイな男とはいえ理不尽なその物言いに納得がいかない。

いやそれより何より、そんな展開なんて望んでもいないし……

顔をぱしゃぱしゃ叩いたり胸をざぶざぶと殴つたり、足をぱたぱた蹴つてみたり。

暴れまわってみるとけれど、がつちり押さえつけられていて、足は未だに地をつかずに逃げずじまい。

ようやく下ろされたと思えば、ベッドの上だった。

「大人しくして」

「こいつ笑うけど、何か悪だくみを考えてそつな顔つき。

逃げようとかれば、ちゅー。

両手が掴まり、氣づけば押し倒されてる。

何度も抵抗して暴れているのと、ずつとちゅー。

「あなたはまだ頭では認めていなこいつだけれど」

息絶え絶えなあたしを見つめる男は、手を細めて優しく微笑む。

「ここの世界でも、どんな理由でされても、あなたとわたし、巡り合えたでしょ、」

これを運命として何とよびますか。

男は浪漫めいた口説きを耳元で甘くあまく囁いた。

そんなのもひ、呪いつてやつじゃない?

無理矢理にもほどがあるよ。

男を一睨み、あたしは男の首を、それも思いつきりかんでやる。

なのに男は、くしゃりと顔を歪んで笑つのだ。

ああくやしご。

出舎い

今思えば最初のトロップはこんな感じ。

その日、なんとなくコンビニのフライドチキンが食べたかった。

学校帰りに新商品のお菓子いくつかと兄妹分のフライドチキン、それからミルクティーの500ミリペットボトルをふたつ買った。

学校から自転車30分・徒歩1時間な我が家へと続く道は、多くの車は通るけれども人は通らない。

そういうことをあまり気にせず、フライドチキンひとつつまり食い（もうすでに腹が空いていた）、調子に乗つてふんふん鼻歌交じりで歩いていたら……はい、別世界。

普通に歩いてトリップしたものだから、状況がわからなかつた。

当然、頭はクエスチョンマーク。

とりあえずフライドチキンを食べ終える。

?

はて。

こべり田舎とはいえ、住宅地。

コンクリートの道を歩こうとしたはずだったのが、いつのまに生い茂った森にいるんだろう。

前後左右、あたりを見渡して森。

何でこうなったのかわからず、とりあえず叫んでみる。

言葉の意味もない驚愕。

多くのカラスらしきものが、あたしのその叫びのせいで、カアカア鳴きながら逃げ飛んだことを、未だに覚えている。

初めはまだどこか瞬間移動したのかなあと、いとこの兄ちゃんが持っている漫画を思い出しながら、なんとかわからんけど、すうい体験したなあと前向きな考え方だった。

といつか余裕ぶつこいてた。

瞬間移動だったら言葉はわからずとも、どうにかしてお金貯めたり、親に連絡すればなんとかなるよね!と頭にちらりとよぎっていた部分があったからだ。

けれど、瞬間移動も何もそうじやないと気付いたのは、植物を始め昆虫や動物が見たこともない色やカタチをしていたのを目にしてしまったせい。

ああ、どうやって帰つたらいいんだろうと落ち込んだのはいつまでもなく。ぐりぐち。

一週間で森を抜けだし、途中羊と犬を掛け合わせた、小さい動物になつかれ助けられて。

近くの村の人を発見すると、その人は狂喜乱舞。

後で聞くと、その動物は異世界の案内人（動物？）とのことで、動物を見るなやいなや異世界人だとわかつたらしい。

その世界は、異世界と行き来は当たり前だという世界だった。

よくわからぬまま連れて行かれ、後に幸いにも保護者がわりとなる領主のおじさんと出会い。

後々のことを思い出すと、1回目の異世界はそのおじさん夫婦と村の人たちが親切で、ひどく恵まれていたのではないかと思つ。

最初言葉はわからず大分聞き取れるようになつてはきたけれど、たぶん未だにあの言葉は片言かもしれない。

ときどき、笑われることもあつたしなあ……。

しばらく領主のお手伝いをしながら、生活。

もつすぐ1年になるだらつた、とこつときに国の政治指南役とその団体が訪問。

それがあの男、リュー・オーとの出会い。

リュー・オーはびつ思つたのかわからぬけれど、あたしは、偶然芸

能人を見たときのような感覚だった。

わーアイケメンだーなんて、意外と面白いだったんだなあと自身に苦笑しながら、そのときは紳士的なひとだと印象を受け、お密様としてみていた。

次元というんだか、世界というんだか、そうこうしたものを見、まさか超えて何度も逢うなどと思はずもなく。

3泊リューオー率いる団体が滞在していたところで、あたしはぐるん。

それは床が水になつたような感覚だった。

勢いよく水中にどびこんだ感じで、あたしは水にどぶりと落ち沈む。仄暗い底は、螢のような淡い光からやがてまぶしい光を放ち、そのまままたいつのまにかトリップしたのだった。

名 前（前書き）

ようやく主人公の名前をだせました笑

名前

一度田のトリップは中世ヨーロッパ、R・P・G風といえば、2度目は現代ファンタジーといったところ。

魔法が使える世界だ。

都會みたいなだけれど、言葉は懐かしの方言だった。

通貨は、紙幣の人物がなぜかサムライだったといふことを除けば硬貨はあまり変わらない。

それと変わっているといえば、子供とお年寄り以外は、力の氣と書いてリキギなる魔力（許可制）によって空を飛んでいるといふことが。

田のあたりにして、少年と宇宙人が自転車使って空を飛んでいる映画の名シーンと、魔法使いの生徒たちが車を運転してたシーンを思い浮かんだのは、仕方がないかもしない。

「それ」以外は、元々住んでいた世界と変わりがないから抵抗なく受け入れられたけれど、「それ」があまりにもぶつ飛んでいるから、やつぱり慣れるのに苦労した。

あたしがトリップして、まず田に飛び込んできたのは、高校生ぐらいの男子だった。

実際は中学生で年下だっただけれど、やたらと背が大きいし、ものす

「僕そつで態度もでかかつたために、そつ思つていただけだ。

開口一番、奴は言った。

「アクマ、俺と契約しや」

はい？

悪魔？？

トリップしたところとせずで理解できてる。

けれど、やはり状況はわからないので、あたしは混乱しているまま
だった。

ところが、人に向かって悪魔はないだろ？悪魔は。

「おい、返事くらいいせえ」

「え……こや何、何故、どうこうですか？？」

奴はため息をついて、あたしを指をついて横を見る。

「先生、これどうすればいいの？」

よくよく周りを見渡せば、体育館のよつなところで、あたしを中心
に、奴と先生らしき人物を先頭に、それを囲つよつよつと多くの男女と
様々な動物がちらほらと集まっていた。

後に聞いたが、そこは実習室で本当の体育館はその倍ある。学校の

土地、半端ない。

「やつですね……人型を召喚できたことは大変素晴らしいですが」

先生は、あたしを見やると、にっこり笑って、あたしを呼ぶ。

人型も何も、あたし人間なんだけれどなあ。

「君、召喚紋（魔法陣のことをらし）の外、出ることができですか？」

何のこだかわからず、多少動きづらこものの円陣の外へ出てみる。

すると奴は、「ああああああああ……」と雄たけびを上げた。

怖。

いや、なんだか悔しそう??

「とても惜しいですよ、皆川くん。本来ならば拘束、意思操作も兼ねる召喚紋が、逆にこれではアクマに反撃をくらうことになるでしょう」

ちなみに皆川くんという奴は、円陣と内容はちゃんと書けたが、その中身の紋を雑に書いてしまったために効果が得られなかつたとのこと。

あたしを呼びだし牢屋に入れさせたことはできたけど、鍵をかけなかつたために結果あたしは逃げることができた、といつわけだ。

「先生、万が一やつなった場合どうすればいいですか」

真面目田そつな女子が手をあげて、質問をする。

「そうならないように呪文は丁寧に書く」と教えたはずですが
……いい機会でのお見せしましょう」

そう先生は苦笑して、あたしを見ながら、手をいくつかの形に組み替える。

「いざれ留つことになりますが、これは上級編ですので補足程度に
とらえていただければ幸いです」

忍者が何かの術をやるみたいだなあとほんやり留つと、小さな円陣が急に現れ光りだし、あたしを囲んだ。

「名前を伺つても?」

ばかに丁寧なのに、それは命令のようだった。

何か言葉を発しようとしたり、それは結局名前にしかならず、抵抗もむなしく全て言つてしまつ。

「まき、む……り……はな……わ」

「契約者・竜央、アクマ・牧村花姫、これより契りを結ぶ」

先生が言つなや否や、囲まれた光は周囲に風と共に放たれる。

リューオーなんて政治指南役のお客様の名前が聞けるつて、すい

偶然だな。

そんなことを思いながら、あたしは気絶した。

三章の（前書き）

お読みに入り登録ありがとうございますー。

拙い文章ですが、よろしく御覧下されまや。

田覚め

結論から言つと、先生は一回田の異世界のリュー・オーだった。

ただ何で氣づけなかつたのかといつと、幾分年を重ねていたようだつたし、何よりあまりリュー・オーを見なかつたといつものもある。

同じ名前を偶然聞いたなあとthoughtだけで、一一度田の異世界トリップ……バロック調の屋敷から体育館のよつなところにさきなり行つたんだ、トリップにわざして何と言つて……で、まさか同じ人物だとは思わないだらう。

さてさて氣絶したとはいふ若干寝ていたといふこともあり（変な夢を見ていた）、あたしはすぐに田覚めることはない。

春眠暁を覚えず、と中国の詩人は言つたけれど、あたしは年中暁を覚えず。

ぼんやりまどろんで、じるじるする。

たまらない、しあわせ。

……たまに一度寝をやらかしてお母さんに怒られるけれどねーなんて、思つたといひで氣づく。

最初に違和感を感じたのは、匂いだった。覚醒。

女の子のほわほわした感じじゃなくって、男一つて断言する匂い。

お父さんや兄ちゃんのきつい香水より断然いいかも、なんて目を開けた。

大きなベット。

広い部屋。

新聞で、じきまたあるマンショングループの広告のよつた配置でおかれた家具や電化製品（全く生活感がない）。

「う、うわあああッ！」

びっくりして慌てて思わず叫ぶ。

「 こ ど こ で す か ！」

混乱してこらめたために、トロップして云々と今まで過去のでかいことを思い出す。

最終的に自分自身が、どこに住んでた誰それで、家族は何人で、どここの高校に通っていた何歳ということを確認するかのように思い出しあ。

そういえば畠川くんとやらに「魔魔」と呼ばれて先生が何かしましたね、と思いだしてだんだん腹が立つたところで、見計らつたかのよう二度よくドアが開いた。

「ああ、起きたようですね」

低い声の主は、あたしに向かした先生……もといリューオーだった。

このときはまだリューオーだとは思わなかつたため、力ある？親切
そうな先生という印象。

「……体は大丈夫ですか？」

何ともないので頷いた。

リューオーは、ほつととした様子で胸をなでおろす。

微笑み、あたしに言った。

「とつあえず食事をしましょ、食べながら話をしますから」

アクマ

食事をしながら、この世界について話してくれた。

それからアクマについてのことも。

召喚した獣や使役いわゆる人型の使い魔のことを、そうひりくるめてアクマと呼ぶそうだ。

「ヒヒでは肯定的な意味として捉えるので、あしからず気にしないでください」

ただ単に言葉や意味といったモノがなく、あてはめたモノがたまたまその単語になってしまったとのこと。

アクマは本来ならば召喚した人が主人となるけれど、あたしは皆川くんという生徒が失敗したため、特別に先生、もといリューオーがあたしの主人となるらしい。

何でもそのクラスでは、まだ習っていない高度な術だつたとか。

リューオー以外召喚紋から、外に出たあたしをアクマにすることができるなかつたとか。

そんなこんな、なんやかんやな理由があつて、とにかくあたしは、リューオーのアクマ、といつことらじい。

主人とか、アクマとか……なんか納得できないけれど。

「今は納得できずとも、もし皆川くんに技術があつたとしたら、危うく皆川くんのアクマになつていったところでしたよ」

もし皆川くんのアクマになつていたら。

リューオーのアクマと、どう違つのだろう。

リューオーのその言葉に、あたしは、アクマがそもそも何をする存在なのだろうと疑問をもち、首をかしげた。

あたしがわからないと判断したのか、アクマについて簡単に説明する。

「基本は隸従ですが近年では愛玩用動物とされていますね。獸よりも人型のほうが力は劣るものの優れた能力があるということもあり、貴重な存在として扱われています。人型のアクマと契約することができる人間は尊敬の念を向けられますが……好色な目で見られることが多いかもしれません」

中学生の男子ですからねえ、命令に背くことがない思つがままの異性と一入つきりとなつたらどうなるでしょうね。

好色の意味がこの時はわからなかつたけれど、後から続く言葉と、くすくす笑うリューオーにそつとした。

笑う場面じやないだろ?」

この男、怖い。

「ああ、わたしですか? あなたは、恋愛対象ではないので大丈夫で

「あ

そつこつハイロハイの意味で見てはいないのにもかかわらず、彼はさらっと言つてのける。

「……まあ、この世界で、たまたま主従関係だったといつ話ですから、しばしの辛抱です。もちつもたれつ、そのうち帳消しとなります」

「んん?

思わず眉を曇らせた。

「どうこつじですか?」

食後の紅茶を優雅に飲みながら、こつこつとリュー・オーは笑う。

「それはおいおい。この世界について教えましたが、ここから本題です」

「本題……ですか」

「ええ、单刀直入に言います。花姫、あなたは世界から世界へと移動することは、何度もでしょうか?」

え、と口をぽかんと開けるあたしをよそに、リュー・オーは淡々と、自分の状況を話す。

「本当にいきなりですね?」

独白（前書き）

「ご覧いただき、またお気に入り登録していただきまして、ありがとうございます。」

注意点として前書きをば書きました。

サブタイトル通り、今回は2人の会話からリュー・オーの部分だけ抜き取つたというよな、変わつた文章の仕上がりとなりました。

申し訳ありませんが、それをふまえたうえで「ご覧下さいませ」。

引き続き、宜しくお願いします。

独白

わたしが8回ほど、世界から世界へと渡っています。

12歳頃を皮切りに、転々と世界を移動してきました。

この世界では20の頃から住んでいて、珍しく長い滞在です。

……旅行感覚で言つたな？

いえ慣れてしまえば、そう思こますよ。

とある日で異世界へ行く、なんていうことがざらでしたから。

ただ渡つた直前は未だに慣れないものです。

例えば今の世界であれば、わたしは学生と云ひこなっていました。

周りが当たり前のように自分と関わりを持つてゐるような振る舞いをしていましたから、戸惑い、驚きました。

見知らぬ方々が、わたしを知つてゐるところ、今ではよくしていただいて大変失礼だと思いますが、当時はひどく気持ち悪さを覚えたものです。

それ以外は何不自由なく、郷に入つては郷に従えといいますか、そのまま勉学を励み、わたしは教師となりました。

そりゃあなたと出合つたのです。

予想していたとはこゝれ、まさかあなたがアクマとなり、わたしと契約をするなどとこゝへりとになるなんて、思いもよりませんでしたが。

すいません、つこ思い出し笑いを。

……ええ。幼い頃、わたしは奴隸だつたといふを、あなたに助けられたものですから。

今はわからずとも礼を言わせてください。あのときは、あつがどうぞひこました。

話を変えますが、花姫は今、何度世界を、あなたの言葉でこゝへとつづつ『
とつづく』してこるのでしよう。

……そりですか、2度目。

やはりお互いてんでんぱらばらひ、世界を渡る回数が違うようですね。

……ええ、そりです。

あなたとわたし、何度も必ず会つことになることですよ。

花姫と、馴れ馴れしつつに呼んでしまつのは、そのせいです。

なるべく『氣をつかますが……やつですか?』いえ、ありがと『おひやこ』ます。

これから先、過去のわたしも、またもしかしたら未来のわたしも、あなたは会うことになるでしょう。

そのときは宜しくお願ひしますね。

……あの頃と逆の立場だと思ひと、少し面映ゆい気持になります。

いつこり、ことだつたんですね。

8回転々と移動し、花姫とわたしが会えば違う世界へ行く、あなたの年齢はほぼ変わらずといったところまでは、わかりましたが。

あなたとわたしが、移動する原因そのものはわからずじまです。

……ええ、しかし9度田以降の花姫には会っていないので、もしかしたら、わたしあまりやせりやが近づいているのかもしれません。

え？

どうこの世界を渡つてきたか、ですか。

お返しと申つたら、あなたは氣を悪くしてしまつでしょうね。

けれど未来の花姫が申つたことですので、わたしあれからせていただきます。

『 知つてしまえば、面白くないでしょ？ 』

ふふふ、悔しそうで何よつ。

…… もうやべ花姫に勝てたよつの気がします。

ただ、少しばかりわたしが体験した話はできませんよ。

未来の花姫ももうでしたし、ね。

それから、この世界についてならこへりでも。

…… わて、何から話します？

……腹立たしい。

「」やかに話すリュー・オーの話を聞いて、一つの単語あげるとしたら真っ先にこれだろ？

確かに、もし自分の立場であつたとしたら「うだうだと思つだけに、苦々しく感じる。

前半はよかつた、よつぼじ異世界トリップ堪えているんだなあーと思わせるへりい、物憂げな笑みを浮かべていたものだから。

過去を思い出してから、だんだんと皮肉めいた微笑みに変わったのがいけない。

「」やかといひ喧嘩が合つ男だとは思つ。

けれども、やにに腹黒といつた喧嘩も喧嘩見えたとは思つてもみなかつた。

……「」やかといひ、こんなおどけおどけしい意味もあつたかな？

本当、前半はよかつたのに。

「昔のわたしも、いつだつたかもしれませんねえ」

ぶつぶつしゃべつてこゐあたしを見ながら、リュー・オーは独り勝手にくす

くす笑ひ。

余計に、腹立たしい。

「さて、もう夜も遅くなりました」とドヤッ

また話は後にして、なんやう寝ましょつか。

夕食前まで寝ていた部屋が、じょろくの間あたしの部屋になるらしい。

わたしはあそいで寝ますから、と言つて端をした先はリビング奥の扉。

ほとと、ものすごいことになりますが、このひと…

……今更、だけれど。

部屋にある衣服を勝手に使つてもいいし、つこどにトイレと浴室の場所も教えてもらひ。

「それでは、おやすみなさい」

そう言ひ、わざとココロホーは浴室へと向かう。

扉が閉まる音を聞き、じょろく、なごとなく虚無感を覚えた。

「お風呂まつりだよー」

気持ちに疑問を持ちながら、それをかき消すように独り言を呟いた。

前の世界ではシャワーはあっても風呂の、習慣といつか文化がなかった。

久しぶりのお風呂。

他人の家の風呂を好き勝手に堂々使っているなんて、図々しいけれど。

ゆっくり浸かる。

夢見た念願のお風呂。

あたしはわくわくしながら、そして、浴室に向かったのだった。

月夜

翌日、一応はリューオーのアクマとして付き従つた。

多くの人の視線と、声をひそめているんだらうけれど聞こえてくる噂話に辟易した。

このときに空飛ぶ車を初めて見て目が点になる。

なるほど鳩が豆鉄砲を食らつたところのことですか、リューオーは独り納得して、笑いをこらえながら、じぎれじぎれに呟いた。

ちよつとむつとする、散々な日だった。

3日目、じつやう生徒が授業に集中できないようですと職員室待機。

隣のキレイなおねーさん先生にお菓子をもらひ、気づけば熟睡。

起きればリューオーの顔が近くで驚く。見渡せば小さな倉庫。

何故。

知らないひとに物はもらひなと、初めて聞いた敬語を外した言い方で怒られ、しょぼしょぼ。

落ち込んだ1日。

4日以降は、自宅待機。

一人で外出禁止令を言い渡される。

何にもないから、お留守番はつまらない。

……夕方、リューオーに会つまで暇だった。

ただいま、おかえりなさい。

言葉のかけあいがなんとなく恥ずかしくなった。

5日、リューオーは休みだといつ。

その日一日、リキギとせどりんものかと魔法を教えてくれた。

アニメ映画で見た茨姫の3人のおばあちゃん魔女のよひ、便利すぎ
る……。

けれど召喚紋なしに、杖や手で何かを描くかのよひに手を振るのは
高度な技だといつ。

アクマあなたもできるはずです、と言われ試しにやってみた。

小さなタンポポひとつ、でてきた。

うわー、あたしでもできるんだーと浮かれてたら、リューオーから
一言。

「この世界では、あなたは何もできなにようですね」

妙に輝いている笑みが凶器になるなんて、言葉の槍がぐさりと心が傷ついた。

魔法使う能力は、皆無に等しいと気づいた悲しい日。

6日目、たわいない会話で、ふと散歩をしましょうといつとこなり外に出た。

びゅんびゅん空飛ぶ乗り物を、地上で見る。

長い柄の草簾をまたがって、庭簾じゃないのが惜しいと思しながら、空を移動する男性には笑った。

一人笑うあたしに、何を理由に笑っているのですかとリューオーは説明を求める。

空想の話だけど元々住んでいた世界ではベタだつたとしゃべると、彼は軽くうなずき、納得したようだつた。

わたしにとつてみればアレですかねと書いて指をした先は、大きな金竜。

驚くあたしを尻目に、リューオーはびつやつて玄関に入るでしきうかねえと遠くに行つた竜を見る。

そ う い う 問 題 な の ？

注田するといひはお互に違つけれど、一人で笑いあつた。

7日目、その日の夜のことだった。

窓越しよりも直接見たほうがいいと、ベランダのガラス戸を開けて大きい満月を見る。

夜風が冷たいけど、その分、月はきれいに映えてると思つ。

「花姫？」

「はい、何ですか？」

いつのまにか帰つてきたらしい。

リューオーの声がした方向を見ようと後ろを振り向く。

薄紅色の花びらが舞つた気がする。

瞬く間に強い風がきた。

「え？」

お互に思わず相手を凝視し、そして自分を見る。

自分の体が、花びらの「」とく散り散りとなつて舞い飛んだ。

「どうやら、お別れののみつですね」

混乱して、体が消えていく感覚が怖くなつて叫びやつなあたしとは逆に、冷静なリューオーはぽつりと言つた。

何でこう落ち着いているのだろう、あたしは逆上しながら、リューオーにハツ挡たりをする。

きょとんとした顔の後、リューオーは何かを察したように微笑んだ。

「無理もありません、わたしはただこの感覚に慣れただけですから」

大丈夫、大丈夫ですよ。

呪文のようになりリューオーは何度もそう言って、あたしを慰める。

花びらが多く舞つにつれて、体がどんどんなくなっていく。

怖いけど、香氣にも月明かりに照らされ舞つ花びらがきれいだと感じた。

「……きれいですね」

彼も同じことを考えていたようだった。

彼の言葉にうなづくと彼は優しく微笑む。

「またお会いしましょう、花姫」

やつして2度目の世界から、あたしは別れた。

2度目のトリップは、とても穏やかに過ぎたのではないかと思つ。

リューオーと長い時間いたのも、このときだけだ。

思えば貴重な時だったのかもしれない。

3度目は半年ほどいた。

昔の中華風といったところで、あたしは小料理店で働く給仕人になつていた。

その世界で、どうこう風な人物の、どうの家族のもので、どんな暮らしかをしていたのか。

トリップ直後、そんな夢を見ていたような記憶が、一気に駆け巡る。

いまだに夢の続きをしていたら、そんな風に思つていた。

リューオーに再び逢ったのは、小料理店の客として入ってきたときだ。

1度目のときよつ年下の母の、同じ年くらうだと思つよつた風貌だった。

後で聞いたことだけれど、リューオーはそのころ友人と旅をしていたとかで、毎食を済ましたら街を出るといふだつたらしい。

……どこで逢つか、わかつたものじゃないですね。

その数日後に、また異世界トリップ。

今度はトイレの扉を開けたら、ようやく見慣れた居間ではなく砂漠。そして何故か扉ごと取つ手を持ったまま、あたしはしばらく一人たたずむしかなかつた。

持つていた扉をハツ当たるように投げ捨て（砂漠ど真ん中で何をどう使うというのだろう）、着の身着のまま歩いた。

激しい日光。

乾いた空気。

砂埃立つせいか、目が痛いのと喉がいがりつぽい。

大粒の汗が流れる。

水、日陰、涼しいところがほしいと求めても、あたりは砂山ばかりで、どこがどうなのかわからない。

それでも行動を起こさなきゃ人に会つことなんてできないと思つて、あたしは歩き続けた。

くらつと田がかすむ。

あー、このまま死んじゃつんだろうな。

そんなことを思いながら、砂に気を取られて膝がくじと落ちる。

誰かの、怒鳴り声が聞こえた気がした。

白い鱗がきれいに覆つた体にしがみつく。

頬がひんやりと冷たくて気持ちいい。

「そりゃあ、脱水症状になるわー。」

現在、桜色のたてがみがなんとも可愛らしい麒麟によく似た動物に乗つてイマス。

乗つている、といつよりも寝そべつてているのか。

ぐつたりしているあたしは、日光を遮るためにわざと大きな黒い布をかけられている。

暑いのかと思ひきや意外と快適だ。

直接肌が日光に当たれば痛いと感じるほど殺人的な暑さだったので、布がありがたく感じる。

ちなみに冒頭の台詞は、その麒麟さんの言葉である。

「何の準備もせずに、無防備のまま、砂漠にいるなどと、何を考えての行動か！！」

麒麟さんは感情が高ぶったとき、ひとつひとつ区切りながらしゃ

べるのが癖らしい。

女の子を思わせる可愛い高い声と風貌とは裏腹に、古風も今風もわざわざした軍人気質な喋り方で麒麟さんは声を荒げる。

はい、なぜか只今説教中デス。

あのあと、いつもやらい麒麟さんに助けられたようだつた。

最初言葉はわからなかつたけれど、乾燥させた果物と、水々しい赤い果実を渡されて食べるよう促される。

大丈夫なのかと不安に思いながらも、有無を言わせない田だつたので、あたしは勇氣をもつて食べた。

乾燥させた果物の味はフルーン、これは脱水症状を起したときに食べるとこうものいし。

そして赤い果実のほうは、缶詰の桃を食べていたのと同じようで味が濃かつた。

これは言葉の意思疎通ができるようにするためのものだつたらしく。

「こんなにやくならぬ、翻訳ももとにつわけデスネ。

「全く我が家出をしなかつたらどうなつていたといつのだ……汝は今頃、死んでいたであつた……」

「うぬ、とせびりやらい、あたしのこいつらしこ。

んん、とにかくひつひつと、少しきつた声だったので聞かせましたが、はい？

イエテ？？

麒麟さんは説教から、やがてハツカタツギみに愚痴をいじつ始めた
ところでした。

……！ ひぐんで終わらせたほうが、いいかもしない。

「あの、麒麟さん」

「……おー。麒麟などとこひ、ビジカルの人人が決めた種別名で、我を
呼ぶなよ。我には×××とこひ、ショシンが決めた、名前があるの
だ！！」

ショシンさんとこひとをわざかし慕つてゐるんだろひ。

えつへんと満更でもなこよくな態度の様子で、麒麟さんは鼻唄々といわんばかりだった。

……帽飛車でも可愛こ。わゆんとか。

それにしても麒麟さんの名前の人になつて、急にほんやりと伏せ
られたように聞こえなくなり結局わからずじまいだ。

「すみません、聞こえなくて……何でおひしゃったのか、もう一度
お願いします」

「何度聞いても無駄だ、わざとやつれかこむのだからな」

「……な、なるせ。では何と呼べばここのですか?」

わざと聞こえなくさせているのなぜしてなのか。

これもわからなこけれど、それを聞いたときもまた……無駄なんだらうなあ。

ふむ、と黙つてしまへりへ考えた麒麟さんが答えた。

「二郎だ。二郎様と呼べ」

セツツハ二郎は機嫌悪そうに、元気と鼻を鳴らした。

まったくあいつは何を考えてああ我を呼ぶのだと、まだぐらぐらと咳く。

ああ、話を反らかうとに失敗……。

その後、街に着くまで延々と、二郎の懶惰につきあつはめになるのは、言つまでもない。

麒麟（後書き）

お戻りに入り登録、どうもありがとうございました！

おかげで今まで200件超えるだなんて……思ってもみませんでした（<_<・）

中盤は、さうじと書く予定だったにもかかわらず（それこそ1話でまとめる予定でした）、話を膨らみすぎてしまって強烈な脇役の登場です。

麒麟とかなんとか、本当だすつもりはなかったのですが…… わたしてじぶんなむじとせいか。

最後に、こつも見ていただきまして感謝感激です。

これからもよろしくおねがいします。

事 情

二口の愚痴は、街に着いても留まる」とを知らない。

今は二口に庶民的な料亭に連れて行かれて、食事中といつたところ。
お金を持つていないと言つたにもかかわらず、奢るからとぐいぐい
引っ張られ、氣づけば椅子に座つていた。

麒麟に奢られるつて何なの、この状況……！

遠慮したものの人間風情が我の飯を食えないのかと、酔つ払つた才
ヤジよろしくとばかりに、二口はからんだ物言いだ。

あたしは大人しく言つ事を聞く。

ていうか。

麒麟……動物？つて飲食店に入つていいものなのか。

二口は得意げに笑う。

「汝は我を何だと思つてゐるのだ、×××だぞ」

その名前がわからないので、何なのかすらもわからなけれど。

麒麟さんだから仕方がない、といつことかな？

曰はく、周囲に幻影を見せてはいるのだと大丈夫らしい。

「今の我は、人間に見えてはいることだろ？」

「……あ、やっぱそのまま入っちゃダメなんだ。」

フン、といつは鼻を鳴らす。

「いつが家出したそもそもの原因は、いつもいつも右往左往扱き扱う人物のせいだといつ。」

それにひどく辟易していたいつが、ついにはあることがきつかけで堪忍袋の緒が切れ、逃げてきたというわけだそつだ。

……麒麟を扱き扱つて、それにしてもすげこひとだな。

要は、いつを24時間の奉仕サービスが嫌になつたといつことだよね？

「どうせ我がいても、あやつがちにこいつとばかり樂するだけだ。せいぜい苦労するがいいわ」

食べ終わったいつは、不機嫌、といつよりかは拗ねている様子で咳き、机に顔を乗せた。

はたと気づいたかのよつて、あたしていつは顔を向ける。

「……といひで汝は何ゆえ、あのよつな場所にいたのだ？」

い、今頃ですか？

んー……何で話せばいいのやう。

トイレし終わつたら砂漠でしたーとか……笑えない「冗談だよ、ほんと。

済ませた後で心からよかつたとか考へてゐるあたり、人としてギリギリだと思われる。

一番格好悪いトリップの仕方だといつのは変わりがないかもしけな
いけれど。

……。

えーっと、

「嘘は騙かたるなよ、人間。その氣になれば、汝うなですら氣げづかん」と
も容易く見抜けるぞ」

こわい。

一息つき蘇る前に、二口ばさりひとつ、あたしを睨む。

……はい。人間、素直が一番ですよね。

冷や汗。

思えばリューオー以外の人?に、ちゃんと話したことがないかもし
れない。

過去を思い出しながら、あたしは一貫で正直に話すのだった。

発見

今までの出来事を順に、あたしは話した。

「口は茶々を入れることなく、相槌を打ち黙つて聞く……というより、あたしの話を耳に入れながら何か考え込んでいる様子だった。

「ふむ、妙だな……」

しばらく経つてから、口の第一声がこれだった。

それから当事者のあたしをよそに、またぶつぶつと独り言を呟く。

その独り言は、口の如前のときのよつて、声がぼやけ聞き取りにくくなっているために、何を話しているのか内容がわからない。

近くの口より遠くの、隣の机に座っている2人の会話の方がまだ聞こえる。

親戚の娘がどうやら結婚するらしく、彼の友人が嘆いていうという話を笑いながら話しあっていた。

どんまい、友人。

「……まあ、我があれこれ思案しても無駄だろつ。おい、もつそろそろ出るわ」

よつやく見切りをつけたのか、口は半ばあきらめこた溜め息をついて店員さんに声をかける。

無礼にも隣の話に耳を立てていたために出遅れ、あたしは慌てて二口の後を追つた。

気づけば支払済みになつていて不思議だつた。

どうやつてその4足でお金出して払えたんだろうか。

料亭の外を出て、街を歩く。

黄土色がかつた白い土づくりでできている平屋の建物が多いその街は、人が多く活氣づいていた。

だんだんと人が混む中で、やがて噴水を中心とした造りでできる大きな広場を目のあたりにする。

砂漠はサボテンいっぱい、オアシスにある植物はヤシの木一本なんていう、ひどいイメージがあつただけに、縁多い植物があるなんて驚くばかりだ。

噴水広場と整備された道以外は、草が生え円を描くかのように樹木がある。

それを横目に、二口は人だかりの多い道を行く。

もしかしてわざとやうしてゐ?

「あ、あの……」

「……お前等は大変な目に巻き込まれてゐるが

あ。

“汝”^{うぬ}から“お前”になつてゐる。

なんでだか格上げされた氣分になつて、それでも嬉しいのは、何故だ。

一コの声は、雑踏にまぎれてゐるため、あまり聞こえなかつた。

一コの前のときや、わざの独り言よりは聞こえたけれど。

それでも聞きづらうことこのまゝ変わらなく、一コの近くに寄つて話を聞いた。

「乗り越え受け入れる、とは言わん。全ては流れのまま身を任せよ」

我の恩恵も少しづれてやうと、寄つた顔が頬に近づいた。

ほ、ほっぺたゆー？

慰められたつてことかな。

あんなセリフだけど、女の子のような声と桜色をしたたてがみの白い麒麟さんなんだ。

「お、見つけた」

こんなかわいい麒麟さんを扱き扱つ一コが仕える人の気がしれないよーますます、かわいい。

そつ思つていたところで、この世界の街に似つかわしくない服装の男が、一コを見ていづつ言つた。

街の人たちは、ゆつたりとした服装だけ少しでも日に当たらぬようにするためか布を体を覆つてゐる。

それに対し男は、前の世界が似合つよつた中華風な着物で、布が薄く豪華そうな服装だつた。

知り合ひ？

男に気づいた一コは、不愉快といわんばかりに苦々しい顔をしていた。

発見（後書き）

……色々、もどかしく感じます。
ええ、色々と。

対面（前書き）

今日中には今日中なのですが、これはひどい。

まさかこんなギリギリに更新するとは思ってもしませんでした……。

対面

只今、現在。

細身で筋肉質な男と、麒麟さん」と「口が公衆の面前で喧嘩をしております。

……恥ずかしくないのかなあ。

喧嘩の始め、ボクシングなどで使う「コング」が、鳴ったような気がしたのは空耳だと思いたい。

「口は舌打ちをする。

「貴様、何故、ここにきた……」

「迎えに決まっているだろ？ 諂びがほしいなら、いくらでも諂びる。戻れ」

男は、表情なく言った。

男が何を考えているのか、あたしにはわからない。

ただかつてないほどの威圧を感じて、一人の会話を止めるのも憚りかねた。

「口は、その下にいたというのだから、おぐびにもださず平然とした様子。

……男もす「」いと思うけど、二「」もす「」いと思つた。

「「」でも命令するのか。詫びなど結構だ、それにしばらく我は暇をもつ。手紙にも書いたであろうが」

「……机に放り出されたあの落書きの「」とか「」理解しようと」

「貴様！ 我が、まがりなりにも、一生懸命、書いた文字を、愚弄するとは、何事だ！！」

「事実だ、現に周りは誰一人解からなかつたぞ。誰一人、な」

「強調するな！！」

辛辣ツ！-

男が話す言葉を、一言で表すならこれだらう。

きつい。

他人事だけど、泣きたくなつた。

だけど男の言葉より何より、疑問に思うことが一つ。

……その4足で、どうやって二「」は文字を書いたと。

男と二「」のやりとりをしばらく聞いていると、なんだか子供が大人に食いかかっているような感じだつた。

兄と妹の喧嘩のよがれだと思い、微笑ましく感じた。

「ああ、Jさんな男よりハナがよかつた。ハナであれば、我を優しく勞り、おやつも充実していったといふの?」

「お前……結局、それか。そもそも家出の原因も「れだ」と思ひと、呆れて溜め息がでる」

「ハハハハハハハハ……Jさんごせつごの怨みは未恐ろしこや……。」

……ん?

今、パーヒーゼリーって言つた??

Jの世界で、パーヒーゼリーがあつたのか。

いやいやそれにしてしも! Jの家出原因って……。

「トドさん! 一晩で吹き飛んだり!」

男は、あたしを見つめつた。

よ、読まれてる?

……いえいえ違いますよ何も思つてないですよ。

思つてませんから!

「アセナーナ、ヤコーニー、熱心に、ほんじたてんしゃぐる。

「あれは我が、シユシンに頼みこんでようやく手に入れた代物だと
「いつのに」……たっぷりのくりこむとやらと共に、ぐちゃぐちゃにつ
ぶし、苺と一緒に食べるのが、我的楽しみだったといつのに……そ
れを貴様……！」

「あれは何もせずそのまま味わうのがいいんだろう、子供が糸がる
な」

「シユシンもそつやつて畠し上がつてゐるのだ、我は子供ではない！　苺を持つてくるまでに何も、全て食べる事ないだらう！？」

落ち転がつた苺が、あれほどまでに虚しいとは感じなかつたか！？」

「もつたいない」としたもんだとは思つたが」「

「ええい黙れだまれえ！！」

……不意打ちの、それも食べ物に関する出来事は、腹が立つもん
なあ。

度があるため、気持ちはわからなくはない。

それから、リードも想ひのとがひとつある。

だからその4ほどで、どちらかといへば「一派」や「二派」を併べてやるが、

に潰したと。

へう……へうなの？

口で道具を使つて、手紙を書いたり、ゼリーをつぶしていたりしていつたの？？

「口につけた、あたしの頭はクエスチョンマークでいっぱいだつた。

そんなあたしのことほんとうさ。

「口はなも口一ノマーゼーとこつ食べ物が、いかに素晴らしいかを語る。

男はうざうざつした表情で、深く、それも長く、溜め息をついた。

「はあ……気が滅入る」

「ならば帰るがよい、わざわざいいまで来て、足労かけたな

「やうやくこなれ、上の命令だ」

「フン、少なくともショシンは我の家出に賛成したぞ？ 誰も文句は言つま」

どこか得意げの口を見て、男は何かを察して、ショシンさんにハツラツあるような言葉をほやした。

「口は渋い表情を浮かべる。

「おこ。シクシンを侮辱するなよ、シクシンは我を思つてだな」

「いや、これ幸いと大方仕事を怠けたいがためだらうよ。はあ……相解かつた、そのコーヒー、ゼリーとやらを手にすれば戻るのか？」

「それでは気が済まん、我がたくさんのお好きな菓子を存分に堪能するまでは」

「……調子に乗るなよ？ ×××

「一門に妥協しようとした諦めたような表情の男は、一門を睨み凄みを利かせた。

……怖い顔。

最後は何を言ったのか、わからなかつたけれど。

男の言葉を聞いた一門は、そして即座に謝つた。

……終わつを告げるゴングが、鳴つた気がした。

「花姫！」

「ちゅうじのとき、誰かが呼ぶ声がした。

中性的な、その声が聞こえた方向のあたりを見渡し、その主を探す。

顔がやけに整つた少年だった。

「花姫！…」

暑いし走ったからといつてか汗ばんでいる。

その少年が、あたしを呼び、そして服を掴む。

「え、リューオー？」

誰かは、なんとなくわかつていた。

けれどリューオーだなんて信じられなかつた。

今までのリューオーより、ずっと幼い。

少年のリューオーに驚いたといつのもあり、思わず問い合わせる。

同時に、光が見えた。

2度目の世界になつた、アクマのときとは違つ光。

丸く淡い緑色の小さな光が、あたしを包む。

ああ、またトリップか。

「……なんとまあ、酷なことをする」

ぽつりと呟く男の言葉は、今のあたしには聞こえない。

ただあたしは、リューオーを見ているだけ。

「花姫、身内が迷惑をかけた……また会おう」

男……結局名前はわからなかつた……の声がそう聞こえた瞬間。

あたしの世界は、黒くぬりつけられる。

また余おひつて、どうこいつだらひつ。

少 年（後書き）

今回長めですみません。

本来であれば『対面』といひ話を一つの話にしてしまつたのですが……つまへこませんでした（^ ^ ;）

風田場

4度田のトロップは4時間強。

長く見積もつてもせいぜい半日だったことだらうと思つ。

リュー・オーラーに会つて、2、3分とつたところか。

「うーうーともあるんだなあ、と慣れた自分がいて怖い。

次で終わることを祈るけれど。

リュー・オーラーは8回もトロップしたと言つてゐるのだから、あたしも8度体験することになるんだろう。

元に戻れる日はいつ？

……そういえば結局あの、男の名前はわからなかつた。

また会うひどいひどい……

もしかしてあの男が黒幕とか……

ぐだぐだと、長く鬱え悩む。

そんな暇があるせむ、じめらへ暗い闇の中に、あたしはいた。

海のよつた、広く深い水の中こころの感覚。

ふよふよとだよつ、あたし。

「……なんとなく寂しいところだと思った。

やがて浮き上がる感覚がした。

そして、気づけば風呂の中だった。

な ぜ だ

案の定、服はびしょびしょに濡れている。

わざわざまで乾いているような感じだったような気がしたけれど……
え、今まで本当に水につかっていたの？

いやいや水に浸かっていたとか、漂つていた感覚はあつたけれど、
あくまでもあれば、暗いが広いところだった！

こんな、狭い、風呂場に沈んでなんかないよー！

……んん？

それは見慣れた風呂場だった。

定位置に置かれている、姉は気に入っているのに家族に不評のシャンプーとリンス。

しんぶるいすべすと、な両親が使っている石鹼と、金属で作られた
ひつじの石鹼台。

香水や体臭が気になるという、妙に鼻が鋭い兄が嫌々使わなければならぬというボディーソープ。

妹の、入浴剤の中に入っているおまけのおもちゃコレクション。

そしてなにより。

あたしの、へちまたわしが!!!

……。

こりは、あたしの実家なのでしょうか?

風呂場（後書き）

間を開けてしまいました（・・・）

へちまたわし 最初痛いのですが、だんだん水になじんでくると、やわらかいスポンジになり泡がたくさんあつていいんですよ、泡が。

兄姉妹

5度田のトコッピをむかえて、今のあたしは4度田は半田へとこうじともあつ3度田の世界の衣装を着ている。

上半身は浴衣。

帯は子供用のシワ加工されているような長い布で、花や色とつづりのひもで装飾してあるものだ。

それから下はチャイナドレスのようなきれこみがあり、ブルマー？のような短パンをはいているという格好。

そここの土地は、基本的に原色が好まれる文化のようで、和服とチャイナドレスをかけあわせたその服は赤い色だった。

それだから。

浴室の扉が開いて、思わずびくりと体が震えた。

「……何やつてんの？ハナちゃん」

吹雪ふぶきお姉ちゃんが怪訝な顔をして、あたしを見ているのは、仕方がないかもしねない。

「んー……『スプレー、なのかな？ でもねハナちゃんいくらいイベントが1年に1回あるかないかの田舎だからって一人遊びした挙句に、お風呂に飛び込む』とはないと想つの」

姉の言葉を聞いて、色々言いたいことがあつたけれど。

それを言つ前に、タオルと服を用意してくると言つて残して姉は出で
いった。

昨日の残り湯だらう、お風呂の中は水いつぱいで。

寒いし、水に濡れた服は重いし……なんかだるい。

溜め息をついた後、のろのろと服を脱いだ。

洗濯の仕方が、まるでわからない。

綿100パーセントかな、これ??

うとうん唸つてこむと兄、シカツナカニ魔星と、ぱつたり出くわす。

……ちなみにあたし裸ですが、兄は平氣な様子で。

「ああ、じめん」

「……お、お姉ちゃんは?..」

「お前、今それ言つことかボケ」

びしゃりとアガ勢いよく閉められた。

……兄は平氣なフリだった様子で。

……ひつも平然としなくちゃいけないのかなあと思つたけれど、お互

い気まずかつたらし。

扉越しから、じたじたと勢じよくコビングあたつに行ひとする音と話が聞こえる。

『お兄ちやん、顔赤いけど

『「ひひさい何もない』

『もしかして』

『違ひ、見てないかい』

『……まだ何も言ひてないんだけど……？』

そんな言葉と共に洗面所の扉が開かれた。

妹の百々季ももきが、にやにやしながらタオルと下着、服を持ってきてくれた。

「はいこれ、吹雪ちやんに頼まれたやつ

「え、どうも……何?」

「いんや～～じやあ、まつたねー」

妹が出てこべと、ふんふん鼻歌が聞こえてくる。

なつかしい、調子つぱずれのアニメンだった。

兄姉妹（後書き）

いつも見ていただきましてありがとうございます！

それからお気に入り登録していただきまして、至極恐悦です。

思いのほか進まないのですが、これからも宜しくお願ひします！

日常

異世界を転々としていて1年以上は経過していると感づく。

それなのに兄妹があまりにも、いつもどおりだった。

トリップした前後の時間は、あまり経ってないという感じだった。

わからないけど、その日だったならいかといふとする。

着替え終わり、さんざん悩んだ結果、あの衣装を洗濯機に入れるこ

とにした。

洗濯コースを“手造り”にして、スイッチを入れる。

……クリーニングの方がよかつただろうか？

まあどうせ着ないし、何かまずいことあっても大丈夫でしょう、うん。

リビングに行くと、ソファに座っている兄が拳動不審だった。

案の定、妹はにやにや笑っている。

……。

「お兄ちゃん」

「な、何だよ？」

「キャーハッチャーヘンターイ」

「おおおま、ふ、ふざけんなよーー?」

からかいつもりで棒読みで言つたら、動搖した兄の反撃がきた。

ほっぺをつねるなんて痛い。

そのあと本人は裸縛め……後ろから首を絞める。

軽くしているつもりなんだらば、苦しい。

妹はついに大笑いして腹を抱え、ばじばじと床を叩いていた。

何この兄妹、ひどい。

「はーい、そこまでねータ食だよー」

のほほんとした声で、姉が兄を止めた。

「適当に分けてつてねー」

テーブルに、ざざんと置かれたフライパン。

鍋敷きの代わりに新聞がフライパンの下に敷いてあった。

中身は大量の焼きそば。

一品料理は、のんびり屋で面倒くさがりの姉が得意とする物で、も

はや「定番となつて」いる。

「あたしはいいや……友達と食べてきたし、『めん』

久しぶりの姉の料理。

だけれど、4度目の世界ですでに「」……あのときは毎食だったけれど、食べたばかりで満腹だった。

本当の「」と話しても、どうせ信じなさいだらうと思いつつ……うん。母と姉は素敵な夢を見たのねと喜ぶだけで、あとは無言か怪訝な顔で見られること請け合い。

「せう……？じゃあ、しょー食べてよ」

「……へいへーい、そういうやアイシビウした？」

「りゅーくんなら部屋にこるよー」

んん？

りゅーくん？？

三人だけがわかる言葉が何なのか、わからなかつた。

「あ、つゅータ食食べてなによね?」

しょーとな、兄の窗型の壁まどがたのかべだとわかるなど。

姉が何を?といつか誰を?いつのものかわからず、あたしはそれを言葉を問い合わせる。

「つゅーへん?」

「? じゃあ、ハナちゃん呼んできてくれるの?」

なんでせつなつたとか、どうこうのとか、なんていつ疑問せともかく。

姉じや埒が明かないと想い、兄を見た。

「つゅーへん?」

「ああ、お前鞄忘れたんだって? 置けばここにアヤイシわざわざ持つておいてくれても。あとで礼言ごきげんへよー?」

ち が う ! !

鞄が何の事だかわからないし、そもそも誰なのがわからなーし。

妹を見た。

憐れんでこらその田は、何だろつ。

「花姫ちゃん……ひどい」

「何が？」

「こくら、じゅーくんがおかしいひとだからって存在自体忘れなく
てもいいじゃない……」

ひとをおかしいだなんてい、妹が一番ひどいと思う。

誰がわからないま、とりあえず“じゅーくん”が2階の部屋にい
るところとで、行つてみる。

“じゅー”つて時点で、まさかと想つたが……。

2階を上つて驚いた。

戸惑いつつ警戒。

元々奥は壁だったのに、扉がある。

兄、姉と自分の3つの部屋を確認。

わかつていたけれどいなかつた、恐る恐る奥の扉をノックする。

緊張。

『はい?』

「 ゆ、夕食です」

『 わかりました』

扉が開かれた。

……ああ、やつぱり。

やつぱり、リューーオーだ。

田を見開いた後、リューーオーはにっこり笑う。

初めて見たときと回じリューーオーのようだつた。

一階奥（後書き）

妹、百々季の部屋は1階にある元書斎つていつ、どうでもここに設定があります。

リュー・オーの笑顔を見て、頭が痛んだ。

3度目の世界のときのよひに、偽の記憶がまた一気に頭を巡る。変わつてこぬところは、リュー・オーがいることだけで、あとは今までじおりだつた。

お盆や正月にときどき余つて兄弟やはとじに、"竜央"としてリュー・オーがいりまじつてゐる。

あのお姉ちゃんが優しくしてくれた、同じ年のはとじと喧嘩した、遊んだなんていう思い出が、とじるどじるリュー・オーになつていて。これが本当なのか嘘なのか、よくわからなくなつていて正直混乱している。

……つまり今のリュー・オーは、あたしより2歳上の親戚で、この春大学進学のために歸郷してこる……とこゝになつてこるわけか。

「今度は、あつさつ逢えましたね」

はて、どうぞいとだひ。

少年のときのリュー・オーに、さつき余つたばかりだけれど……今度は？あつさつ？

頭は疑問でいつぱになあたしに、すかさずリュー・オーは答えた。

「……前回2年程いまして、地方に行つた先に、あなたに出逢いましたから……そつ思つただけです」

そして思いだしたかのよひに、リュー・オーは一田部屋に戻り、持つてきた鞄を、あたしに渡す。

……最初のときまで持つていた鞄だ。

鞄とリュー・オーを交互に見る。

最初の世界のときこにいたリュー・オーが、今こにこむつてことへ。

んん？？

「前の世界で、あなたが置いててきたといつ鞄を持つてきただのですが……余計なお世話でしたか？」

あたしは首を横に振つて、お礼の言葉を何度も言つた。

2度と戻つてこないと思つていたから、余計に嬉しく感じる。

ふと、姉の声が聞こえた。

そつこねば夕食の用意ができたからつて、リュー・オーを呼んだんだつけ。

「わい、それじゃあ夕食を食べに行きましょつか？」

「…………」めぐら、あたし食べてきただから、いらないの……部

屋にいるつて、お姉ちゃんに言つてもいい?」

「はい、わかりました」

リューオーに敬語じゃないのは、あたしに近い歳どころの、よくわからぬ記憶が、そいつをせているためだ。

リューオーじゃない誰かとの思に出だとわかつてこるはずなのと、よく彼との思い出だと何故か、納得している自分もある。

思わず彼を引きとめ、慣れ親しんだ家族や友達と同じように話をしつしまい、それに気づいて、タメ口だったことを謝る。

リューオーはきよとんした顔をした。

「ちやんと余話をしたのは一度きりですが……そのときあなたは、素のままに話してましたよ?」

小首を傾げ、微笑んだ。

……ああ、やうか。

「わづだね、夕食、引きとめて」めんね

「いえ、お氣になさりず、……では失礼します」

リューオーの言葉に気付いた。

ちやんと会話をしたのは、2度目の世界以来だ。

今より随分と大人のリューオーと。

時代錯誤。ならぬ、人物？または世界錯誤。

今より前の、過去の彼と、逢つてはいても会話した記憶はない。

リューオーが言つ、その“一度きり”は……あたしにとつて、未来の話？

近いうちにまたトリップするかもしれない。

そんな、まだわからないことに、あたしは恐怖を覚えた。

廊下（後書き）

拙い文章に、見ていただきありがとうございました。

無駄にシリアスにしようとしたり、長くしようとしたりで、今回5度目の世界は更新が滞り気味……。

元々住んでいた世界の主人公には申し訳ないですが、早く抜け出したいと思っているのですが……主人公、嫌々で行きたくないようです。

泣き顔が、見たいのに……

ではでは、次回も宜しくお願ひします。

不安は残るけれど、ひとまず“流れのまま”に。

久しぶりに、自分の部屋にきた。

トリップ前後の時間はそんなに経っていないため、周りからすれば、毎日ここで寝てこらんだから何を言っているのか、と思つだらう。

けれど本当に……それこそ一年ぶりの、自分の部屋だ。

感傷に浸る。

しみじみつて、ここにひととこつのかもしれない。

鞄の中身を確認。

使えなかつた携帯電話を、わざわざ見てみた。

……よし、使える。

今思えば、この世界の時間が止まつていたらなんじゃ?と思つ。

あくまで思うだけだけど。

待ち受け画面は他人からマイナーだと言われているキャラクター。

日付と時刻を見てみて、今日が金曜日でよかつたと心の底から思つ。

ゆっくり休むことができるんだ……。

安心して横になる。だらだら。ぐだぐだ。

……あれ、なんか忘れてる?

1階から母が、あたしを呼ぶ声が聞こえてくる。

「あーー?」

「はよりともーー」

1階に降りて、母がいる……コビングに向かう。

何で妹は、正座をさせられているんだろう。

姉はおひるどひるたえ、兄とリコーオーは我関せずといわんばかりに平然と夕食を食べている。

帰ってきたのだから父は、ここにこと笑つて母の隣にいた。

父の笑顔と母の機嫌が悪そうな顔の、表情の差が余計に怖い。

「……何?」

「いいから、あなたも正座して」

「何で?」

「いいから

「な

「座れえ！」

母は質問に答えてはくれず、あたまじこ剣幕で怒鳴りこむ。

何なんだ、まつたくもつ。

「来週あんた、テストあるって言つてたよね？」

「……はい？」

「言つたつけ？」

「カレンダー」

「……？ あ」

母は壁がけのカレンダーがある部屋を、顎を使つて見るように促した。

カレンダーには、テスト期間と、その詳細が書いてある。

「まがう」とない、あたしの子。

さあ、と顔が青ざめた。

これは――

「あなたもか！」

すかをはず母の怒号。

リュー・オーにこんな姿見せて「めんねえ」と罵つてゐるけども、容赦しない。

「テストを並れるなんてどうかしてるわ……」だいたい学生の本業つてのはね

声を荒げて説教が開始される。

妹が忘れやすいってのは常だからわかる。

だけどあたしの場合は一年半超の空白があるんですけどは言へず。

母の説教、父のフォローとこうかのきつい皮肉を、妹と一緒に耐えるしかなかつた。

足が痺れたつてこうと、足にちよつかにだして、ひどいときは足を踏む親だから、もぢりん黙つてゐる。

懐かしさを覚えるけど、これはこれで遠慮したい。

……ええ、そんなわけで。

テスト勉強を、始めねばなりません。

正 座（後書き）

「反応と、悶えているのが笑える」

足痺れたっていって、悪戯心からか笑って、ちょっかいだすひと、いますよね……。

変化？

その世界には通用しても、異世界に行けば通用しない。

例えば教科書とノート。

言葉も文字も違うのだから、異世界の文化や、歴史、思想も違つてその世界にしかないモノ……魔法や怪物といった空想物だと思つていたモノが、そこにある。

それらがある、通用するだなんて教科書は教えてくれないし（当たり前だけれどー）、役に立たなかつた。

友達とのやりとりで描いたラクガキを見て、思い出し笑いをするくらいしか使えない。

例えば携帯電話。

家族に連絡をとりたかつたけれど、とれなかつた。

メールの内容を見て懐かしむ。

イタズラで撮つた兄妹たちの、ふざけた画像を見つめる。

そんなことしか、できないます。

例えば学校指定の制服、体育着。

一度目の世界で、領主のおじさんが保護者ということもあり、あたしは常にドレス着用だった。

淑女はズボンを履かないだとか、足がでているビダスカートはみつともないとか恥ずかしいとかで。

あたしは使えないそれらを鞄に詰め込むしかなかつた。

……鞄を持ってくれたリューオーに、本当感謝だ。

なかつたらと思つと、どうすればよかつたんだら、あたし。

教科書は全てなくしたというわけでないから一部の授業は忘れたで押し通す。

体操着や制服……最悪私服で過ごさなければならなかつたといふことか。

……それはかなり嫌だな。

ないないなくした！ どうしよう！ つて、今頃慌てる頃かもしれない。

土日は兄やリューオー、もしくは姉が庭教師兼見張り役で、妹と、死に物狂いで勉強した。

あまりのバカさ加減に、呆れかえられる。

さすがにリューオーに教えてもらつた時は恥ずかしかつた。

そして月曜日。

久しぶりの制服は、ちょっときつめ。

太ったという事実に少し焦った。

久しぶりの学校は、かなり緊張する。

心臓の鼓動が激しくて、自分の心臓の音が聞こえるほど。

友達におはようというのが、なんとなく恥ずかしい。

今まで先生に、どう接していただろう？

授業がつまらないと思つていたけれど、こんな面白かったっけ？？

テレビの話や流行の話についていけなかつたけど、友達と[冗談を言
い合つのは、楽しいと思つ。

いちいち感激しているあたしに、何か変だと思つたらしく。

平常心を保つていたようだつたけれど、周囲にはバレバレのようだ
友達の一人が、休日何かあつたのかと聞いてきた。

どう言えばいいかわからないけど（正直に言つても夢だとか妄想だ
とか言われるだけだと思つ）、何もないと言つほうが無難だと思つ
てそう言つた。

「ウソ、だつて顔が変わつた」

「なんかフンイキ変わったよね」

「大人っぽくなつたかんじ〜」

……彼女たちが言った言葉は何気ない一言だったかもしない。

けれど突き刺さるように痛かつた、実際友達より最悪（早生まれの友達と、あたしの年の差で）2年は年上だから。

変わつたらしいあたしを見て、彼女たちはカレジができたんじゃないかどうかで盛り上がる。

……鞄の中身は確かに全部使えたけれど。

元々住んでいた世界だけれど、何かが違つ。

居心地悪くて、違和感を感じた。

元に戻つた、帰れたことは、嬉しいはずなのに。

なんとなく、あたし一人と世界、線引きされたような気がした。

父 親

勉強は、友達のあの話から、もつやる気がでなくなつた。

否定したいけれど、わかっている。

リュー・オーが8回トリップするたびに、あたしに逢つたといつのだ
から、またトリップするだらう。

勉強したとしても、無駄なんぢやないだらうか。

そこに何の意味がある？

トリップして、その後はどうなるんだらう。

また、いの世界の時間は止まつたまま？

今度帰つてきたときどうなるんだらう。

浦島太郎みたいになつたとして、帰るまぢその間、家族は、いなく
なつたあたしをどう思つんだらうか。

考えたら、きりがない。

不安だらけ。うつうつ。

部屋に引きこもつてゐるヒノックの音が聞こえ、珍しく父が声をか
けてきたようだつた。

何の用か尋ねた。

父はあたしの部屋に入つてもいいかと聞いたけれど、それはびびつからず父の中で決定のようで、返事する間もなく入る。

勉強机用のキャスター付き椅子を、父はベット側に寄せて座ると、あたしにベットに座るよう促した。

しばらく黙つたままの状態で、氣まずかった。

父は、おもむろに口を開く。

「……数日、拳動不審だね」

「普通なんだけれど……そんなに変だった？」

父の目を見る。

相変わらず何を考えているかわからないその表情は、しかし優しいと感じる。

「変だった、珍しくヨリが心配してたから」

「お母さん? うわ、相当だね」

「僕は面白かったけれど、ヨリが見てられないって」

「……だから、お父さんの出番だつた」とへ.

「そうこう」と

あたしの様子を見た、父の感想について、あえて何も言わない。

「うむ。されど眞面目な母が、普段物をあまり言わない父に、よくからかわれたというのは聞かされている。

兄は父に似たと、兄が何かするたびに母は言つ。もはや母の口癖だつた。

父は、言つだけ言つて黙る。

「何か、話をするように、促されている気分、なんだけれど……」

「だつたら話せばいい。キミがこゝほしくなこと言つまでも、ここにいることはゆずれないよ」

別にあつち行つてーとこつほじではないけれど、気まといのは確かだ。

黙つてこるあたしをよそに、しばらくかかるかなあと言つて父は本棚に行つた。

敷きつめられていた本にある書かれていた背文字を眺める。

……本当に屈座る氣だ、このひと。

とこつが少女マンガ読むのか、真つ先に純文学を選ぶと思つたけれど……似合わない。

思わず笑つた。

「何で途中から？」

「家にある本といつも本は読む性分だからね」

今まで勝手に読んでいたといつこと……？

ちゅうと腹が立つた。

「この、活字中毒」

「本の虫と呼んでいただければ、更に光榮だね」

あたしの悪態に、せりと受け流した父は、マンガを読み始める。

大人の展開になつてゐるマンガであれば読まないようになつて止めていた
だろうけれど、恋愛よりも人間成長重視な物語のためにそこは安心
して親に見せられる。

まず、父親が少女マンガを読むといつことは、ないはずなのだけれ
ど。

変な光景。

……。

「お父さんね？」

「ん？」

「もし、あたしが、いなくなつたらいひつする？」

「氣づけば、『んな』ことを質問した。

父は本を閉じ顔をあげて、あたしを見る。

そういえば、父が読んでいた少女マンガの主人公は家出したんだつ
け？

……好きな、ひとのために。

あたしの場合は、何のためにトリップしてんだら？

「今？」

「たぶん、今」

父は、顔をしかめて黙っていた。

考え込んでいるからか、読んだページにしおりがわりに指を挟み持
ちながら、腕を組む。

癖付くから本棚行つて元の場所に戻せ、と言つたかつたけれど黙つ
た。

真剣な父を、あまり見たことはなかつた。

「……君を探すかな？ つん、将来で嘆くならキミが納得いくまで
付き合つ、恋愛沙汰であれば男を殴る。事件に巻き込まれたのであ
れば……殴つするかわからないけど、『な』れが僕にとつて一番怖い」

「セレニティまで参拝すべし。」

「親とは、やうこつものだよ」

「……探しでも、見つからなかつたら?」

「成人になつた頃には僕はあきらめる。無事だらうつて思つ事にする」

「潔いつていうんだが、薄情つていうんだが」

「子供は巣立つものだらう? 僕なんか滅多に両親に連絡を入れないから……どつちが薄情かつて思つよ」

「ああ、だからお祖母ちゃん」

「こやあれはキミたちの声が聴きたいだけだと思つたが」

「可愛くない息子だったと、キミたちを見て会つたび言つからね、あひとば。」

とめびきかかつてゐるお祖母ちゃんの電話を思つて出しながら呟くと、父は苦笑した。

母の声が聞こえる。

「あ、もつすべじ飯か。」

「せとと行きますか」

「うそ」

部屋の扉を開けると、いい匂いがしてきた。

今日はハンバーグのようだ、ソース独特の匂いが辺りをただよう。

階段を下りる、父の背中を見てふと泣きたくなつた。

ヨリが作るなんて珍しいねと関係ないことをしゃべる父は、笑つて頭を撫でる。

いつまでもずっと。

ずっとこの世界にいたかった。

穴と声

リューオーと逢つて1週間も、彼はいなかつたと思つ。

いつのまにか消えるよつこいなくなつていた。

2階奥の扉もなくなり、家族にたずねても、誰のことだと逆に問いかけられる。

……あたしのときも、やうなのだらうか。

寂しいと思つけれど、家族に心配せらるよつは、それはそれでいいのかもしないと思つた。

最後の日の夕方、また一人きりになつたことがある。

挨拶を交わして雑談。

ふと、こんな話になつた。

「花姫は温かい家族をもつて、幸せですね」

それを聞いて面映ゆい気持ちになる。

そんなことはないと否定しつつ、けれど妙に照れくさく感じた。

話を変えようと、やうこねばとでもこつよつと、あたしは言つた。

「リューオーの家族は違うの?」

冷たい笑みを浮かべて、リューオーは答える。

「他人のほうが、少なくとも優しかったんじゃないでしょうか」

淡々と話すリューオーに、どう、返事したらわからぬ。

「めんどうのも変だし、取り繕つても墓穴を掘るだけだと思つたから、しばらく黙ることしかできなかつた。

リューオーは苦笑して、急に明るい話題をふつたけれど、あのの冷たい笑みは忘れそうにない。

リューオーがいなくなつて1週間。

リビングの壁で、ひとつのかなしみが少し気になつたけれど、深く考えることはなく1日を過ごす。

日に日に大きくなつていぐ、黒いしみ。

同時に声が聞こえる。

最初はかすかに聞こえる程度だった。

けれど、しみは大きくなると共に声もはっきりとした口調になる。

子供の声だ。

独特の高い声は、かわいいと思つけれど、かえつてそれがより一層怖く感じる。

誰も声はおひか、もはや穴となりつゝあるしみをえ氣づかなかつた。

声も穴も、あたし以外誰も指摘することなく氣づかない。

リビングに行くたびに大きくなつていて憂鬱だつた。

ひどい恐怖体験。

『きて、早くここにきて、ごめんね、もう、そこにほいられないの』

何を言つてゐるか、わかつてはいる。

わかつてはいたけれど、その言葉を無視し続けていた。

1ヶ月経つた頃、母がテストの点数結果が全部わかる頃だらうと催促してきた。

全体的に平均点で苦手な分野は赤点ギリギリといつ、散々な結果に呆れた表情を浮かべる。

ちなみに妹の点数はよかつたらしく、スナックを食べながら、呑氣にテレビのバラエティ番組を見ている。

中堅芸人にいじられた若手芸人の、少し情けない姿に笑つていた。

……要領いい妹が羨ましい。

「聞いているの、花姫？」

母の声が荒くなつた、同時に風がどこからともなく吹いてくる。

風の行きつゝ先は穴だつた。

だんだん風は強くなる。

「やだ、台風？」

「誰？ 窓閉め忘れたのー？ 寒いんだけどー」

その場にいた母と妹は、それでも穴に気がつくとなつた。

『「いめんね、お願ひ、きて、こなーとだめになつやへ、はやく…
…いい加減にしろよ』

穴の中の子供の声は、急に男の声へと変わつた。

ぼそぼそと声が聞こえた気がしたけれど、さつきわかるのは男の声。

『黙つていたけどもいつんぞつだ、おこ、さつやと穴に入れよ

男の声は、高圧的な態度で、命令する。

従つ氣は更々ない。

そしてまた一段と低くなつた声で、穴は詰つ。

『従つ氣がないなら、従わせるまでだ』

「……花姫、どうした

いつのまにか家族全員そろつていたことに驚いた。

不思議そうに、みんな、あたしを見る。

風はやうに強くなり、あたしを吸いこもうとしていた。

……ブラックホールってこんな感じなのかな？

呑気にそう思った。

「ばーばー

また会えたらいいね。

この世界に、あたしは別れを告げる。

『やれつと落ちた先は、荒野。

天氣は集中豪雨、早くも服がびしょ濡れる。

でもやんなの氣にしなかつた。

田舎の『氣持ちでこっぽいこっぽい』だった。

こんなにもあつけない別の方をするとせ、思わなかつた。

あの壇は、誰なんだ？

ダメになるつて、あたしがいた世界に『いられな』つて、あれが最後なのだらうか。

いや最後のよつだつた。

こつもだつたら……この時点であやしめ慣れてる田舎が嫌だつた……、急に世界が変わるやうなのこ。

『やつして今回に限つて、強制とはこゝ、血り赴くよつとしたのか。

……異世界に行くのだらうとわかるモノ、やつしてあたしが行くとゆつたのか。

わからぬものが多すぎた、ゆづりゆきもよかつた。

友達や家族との思い出が、よみがえる。

1ヶ月過げた思い出と。

今まで覚えているかぎりの、出来事と。

恥ずかしいことも、怒ったことも、悲しかったことも。

嫌な思い出のはずなのに、すべてがいい思い出のよひだつた。

もう、帰れない。

帰ることが、できないかもしない。

帰れないんだ。

笑いあう友達。

笑いあう家族。

もう会うこともないのか。

声をだして思い切り叫んだ。

どもならないのに、その場であたしは嘆く。

冷たい雨とともに類を伝い流れ落ちるもののは、何故こつも温かいのか。

涙は、止まらない。

どれくらい時間が経つただろう。

集中豪雨は、にわか雨となり、涙は枯れたところで人が来た。

テレビ番組で見る時代劇で見るような、赤い和傘を持っている。

こんな、邊鄙へんびなどはないで？

向ひのものと思つたらしく。

あたしに返付くと、走つて近づきながら傘を差し出した。

……姉あねさんと呼びたくなるような、勝氣な顔つきの女性だった。

「あや、じとんといひに若こ娘わらわさんが、どうして？ 風邪かぜ引くよー。」

傘に合つた臙脂色の作務衣を脱ぎ、あたしにがぶせる。

「へつらつたが我慢して。とつあえず、これがタオルがわりね」

にむこにむこして、ひどことこつわけでもなかつたので黙つておぐ。

むしろTシャツ一枚となつたその女性は寒いだけ、その親切心
がありがたい。

彼女は、やつたないとじだけ家にいる招待するよと聞く。

抵抗してみるも遠慮しないでと言ひて、さすがに力いっぱい、あたしを抱きしめた。

力が強くて逃げようと思つても、に、逃げられない……。

見知らぬ人を、いくら同性とはいえ抱きしめるなんて。

怪しい。

ありえない。

そんな単語が、頭にチラついた。

けれど彼女は、おぐびも見せずアハハと笑うだけだ。

何の歌かはわからないけれど鼻歌交じりで、スキップする。

「それにしてもあなた大概ベタね、元気出して」

女性の言つてこなしがよくわからないまま、あたしは連れだされた。

彼女の名前は、トウ。

後から聞けば、トウは「恋逃れの山」と呼び名がつくくらい悲恋もの逸話が多いそうだとかで。

1年に4・5人はフーラレタ、もしくはワカレタ理由から、ひとり訪れることがあるといつ。

あたしも、やうこいつひとだけと回じと思われていたみたいだった。

トウさんは想い込んだらじつも她的考え方から突き進むようついで、そういう理由で山にいたわけじゃないと真っ先に否定したけれど、聞いてくれなかつた。

「……このここの。聞かないし、しばらへりにこにこにこ。でもバカなこと考えねやだめよ」

はやまつりやだめよと彼女はまわつて温かいお茶を差し出した。

……何をせやあると?

トウさんの家は山小屋と呼べばよいのか、素朴な小さな家だった。

中は、くしゃくしゃとに丸まつた紙と筆がそこらがしりに散りばつておつ、ねずみ辞にもキレイとは言えない。

色が染みつこてこる小さな皿が、たくさんある。

皿がひつへつ返り、じぼれでこるものもあるけれど。

よせびじじびじれと、部屋を眺めていたらじー。

「ん? 私、絵師よ。驚いた?」

何も言わなかつたけれど、彼女は言つた。

失礼だつたと反省して謝ると、彼女はいにのこいの、と手を振つた。

「興味、ある？」

きらりと、彼女の目が光った気がした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9465s/>

一緒にトリップ！

2011年6月5日16時04分発行